

日蓮大聖人御書全集

にいあまごぜんごへんじ

新尼御前御返事

新版
1219
ゝ
1223

にいあまごぜんごへんじ

新尼御前御返事

ぶんえい ねん がつ にち さい にいあま

文永12年('75) 2月16日 54歳 新尼

甘海 苔 ひと

おく た お おおあまごぜん

あまのり一ふくろ、送り給び畢わんぬ。また大尼御前よ

かしこま い そうつろう

りあまのり、畏り入つて候。

ところ み のぶ たけ もう するがのくに みなみ 当

この所をば身延の岳と申す。駿河国は南にあたりたり。

か くに うきしま 原 うみ 際 かいのくにはきいのごう

彼の国の浮島がはらの海ぎわより、この甲斐国波木井郷・

みのぶ みね ひやくより およ よ みちせんり 煩

身延の嶺へは、百余里に及ぶ。余の道千里よりもわずらわ

ふじかわ もう にほんだいいち 速 かわ きた みなみ なが

し。富士河と申す日本第一のはやき河、北より南へ流れた

かわ とうざい こうざん たにふか そう たいせき

り。この河は東西は高山なり。谷深く、左右は大石にして、

たか びようぶ た なら

高き屏風を立て並べたるがごとくなり。河の水は筒の中に

がつびよう や いい

強兵が矢を射出だしたるがごとし。この河の左右の岸を

伝 かわ わた とき かわ いしおお

つたい、あるいは河を渡り、ある時は河はやく石多ければ、

ふねやぶ みじん

舟破れて微塵となる。

ところ 過 み のぶ みね もう たいせん ひがし

かかる所をすぎゆきて、身延の嶺と申す大山あり。東は

てんし みね みなみ たかとり みね にし しちめん みね きた み のぶ みね

天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺な

たか びようぶ よつ 衝 立 みね のぼ

り。高き屏風を四つついたてたるがごとし。峰に上つてみ

そうもくしんしん たに くだ 訪 たいせきれんれん

れば、草木森々たり。谷に下つてたずぬれば、大石連々た

おおかみ こえやま じゅうまん ましら 鳴 たに 響 しか 妻

り。大狼の音山に充満し、猿猴のなき谷にひびき、鹿のつま

恋 こゑ 哀

せみ 喧

はる はな なつ

をこうる音あわれしく、蟬のひびきかまびすし。春の花は夏

咲 あき このみ ふゆ

み

山 人

にさき、秋の菓は冬になる。たまたま見るものは、やまがつ

焚 き 拾 姿 ときどき 訪

ひと むかし 馴

がたき木をひろうすがた、時々とぶらう人は、昔なれし

どうほう か しょうざん しこく よ のが こゝ地 ちくりん しちけん

同法なり。彼の商山の四皓が世を脱れし心ち、竹林の七賢

あと かく やま

みね のぼ 若 芽

が跡を隠せし山も、かくやありけん。峰に上つて、わかめや

生 み せうら 蕨 なら

おいたると見候えば、さにてはなくして、わらびのみ並び

た たに くだ 甘 海 苔 生 たず

立ちたり。谷に下つて、あまのりやおいたると尋ぬれば、

誤 見 芹 茂 伏

あやまりてやみるらん、せりのみしげりふしたり。

ふるさと おも 忘 そうら いま

古郷のこと、はるかに思いわすれて候いつるに、今この

甘海苔 みそうら 由 こころ 思 出 憂 辛

あまのりを見候いて、よしなき心おもいいでて、うくつら

片海 市河 小湊 いそ むかしみ

し。かたうみ・いちかわ・こみなとの磯のほとりにて昔見

甘海苔 いろ かたち 変

しあまのりなり。色・形・あじわいもかわらず。など、我が

ふぼ たま 方 違 恨

父母かわらせ給いけんと、かたちがえなるうらめしさ、

涙 抑

なみだおさえがたし。

止 そうら おおあまごぜん ごほんぞん おんこと

これはさてとどめ候いぬ。ただ大尼御前の御本尊の御事

仰 遣 思 煩 そうろう ゆえ

おおせつかわされて、おもいわずらいて候。その故は、

ごほんぞん てんじく かんど わた そうら 数 多 さんぞう

この御本尊は、天竺より漢土へ渡り候いしあまたの三蔵、

かんど がっし い そうら ひとびと なか 記 置 たま

漢土より月氏へ入り候いし人々の中にもしるしおかせ給

さいいきとう

しよ

ひら

みそうら

ごてんじく

しよこく

てらでら

わす。西域等の書ども開き見候えば、五天竺の諸国の寺々

ほんぞん

みな

っ

わた

かんど

にほん

わた

の本尊、皆しるし尽くして渡す。また漢土より日本に渡る

しようにん

にちいき

かんど

い

けんじやとう

そうろうてらでら

聖人、日域より漢土へ入る賢者等のしるされて候寺々の

ごほんぞん

みな

勘

っ

にほんこくさいしよ

てら

げんごうじ

し

御本尊、皆かんがえ尽くし、日本国最初の寺、元興寺・四

てんのうじとう

むりよう

てらでら

につき

にほんぎ

もう

文

はじ

天王寺等の無量の寺々の日記、日本紀と申すふみより始め

おほ

につき

残

しる

そうら

てらでら

て多くの日記にのこりなく註して候えば、その寺々の

ごほんぞん

隠

なか

ほんぞん

御本尊、またかくれなし。その中にこの本尊はあえてまし

まさず。

ひとうたが

い

きようろん

人疑つて云わく「経論になきか。なければこそ、そこ

けんじやとう

えぞう

書

たてまつ

もくぞう

造

ばくの賢者等は、画像にかき奉り木像にもつくりたてま

うんぬん

きようもん

がんぜん

つらざるらめ」と云々。しかれども、経文は眼前なり。

ごふしん

ひとびと

きようもん

うむ

たず

ぜんだい

御不審の人々は、経文の有無をこそ尋ぬべけれ。前代に

造

書

なん

思

びやくあん

れい

つくりかかぬを難ぜんとおもうは僻案なり。例せば、

しやかぶつ

ひもこうよう

とうりてん

かく

たま

釈迦仏は悲母孝養のために忉利天に隠れさせ給いたりしを

いちえんぶだい

いっさい

しよにん知

もくれんそんじやひとり

ば、一閻浮提の一切の諸人しることなし。ただ目連尊者一人

ほとけ

おんちから

うんぬん

ぶつぼう

これをしれり。これまた、「仏の御力なり」と云々。仏法

がんぜん

き

あらわ

とき

広

は眼前なれども、機なければ顕れず、時いたらざればひろ

ほうに

どうり

れい

たいかい

しお

とき

したが

まらざること、法爾の道理なり。例せば、大海の潮の時に随

ぞうげん じょうてん つき じょうげ 満 欠
つて増減し、上天の月の上下にみちかくるがごとし。

いま ごほんぞん きょうしゅしやくそん ごひやくじんてんごう しんちゅう
今この御本尊は、教主釈尊、五百塵点劫より心中に

納 たま よ しゅつげん たま しじゅうよねん

おさめさせ給いて、世に出現させ給いても四十余年、そ

のち ほけきよう なか しやくもん 馳 過 ほうとうほん こと起

の後また法華経の中にも、迹門はせずぎて宝塔品より事お

じゅりようほん と あらわ じんりきぼん ぞくろい こときわ そうら

こりて寿量品に説き顕し神力品・嘱累に事極まつて候い

こんじきせかい もんじゅしり と した てんぐう みろくぼさつ

しが、金色世界の文殊師利、兜史多天宮の弥勒菩薩、

ふだらくせん かんぜおん にちがつじょうみようとくぶつ みでし やくおうぼさつとう

補陀落山の觀世音、日月淨明德仏の御弟子の藥王菩薩等

しよだいじ われ われ のぞ たま かな

の諸大士、我も我もと望み給いしかども叶わず。これらは

ちえ さいかく ひとびと 響 ひ 浅

智慧いみじく才学ある人々とはひびけども、「いまだ日あさ

し。学も始めなり。末代の大難忍びがたかるべし。我わ

ごひやくじんてんごう

だいじ

そこ

隠

置

しん

でし

五百塵点劫より大地の底にかくしおきたる真の弟子あり。

讓

じようぎようぼさつとう

ゆじゆつぽん

め

い

これにゆずるべし」とて、上行菩薩等を涌出品に召し出だ

たま

ほけきよう

ほんもん

かんじん

みようほうれんげきよう

ごじ

させ給いて、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字を

たま

われめつど

のち

ゆずらせ給いて、「あなかしこ、あなかしこ。我滅度して後、

しようほういつせんねん

ぞうほういつせんねん

ぐつう

まつぽう

はじ

正法一千年、像法一千年に弘通すべからず。末法の始めに

ほうぼう

ほつし

いちえんぶだい

じゅうまん

しよてん

怒

すいせい

謗法の法師、一閻浮提に充滿して、諸天いかりをなし、彗星

いってん

渡

だいじ

おおなみ

踊

だいかんぼつ

は一天にわたらせ、大地は大波のごとくおどらん。大旱魃・

たいか

たいすい

おおかげ

だいえきびよう

だいききん

だいびようらんとう

むりよう

大火・大水・大風・大疫病・大飢饉・大兵乱等の無量の

だいさんなん

いちえんぶだい

ひとびと

おのおのかっちゅう

大災難ならびおこり、一閻浮提の人々、各々甲冑をきて

きゅうじよう

て

握

とき

しよぶつ

しよぼさつ

しよだいぜんじんとう

おんちから

弓杖を手になぎらん時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力

およ

たま

とき

しよにんみなし

むけんじごく

お

の及ばせ給わざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮つるこ

あめ

繁

とき

ごじ

だいまんだら

み

たい

と雨のごとくしげからん時、この五字の大曼荼羅を身に帶

こころ

そん

しよおう

くに

たす

ばんみん

なん

ないし

し心に存せば、諸王は国を扶け、万民は難をのがれん。乃至、

ごしよう

だいかえん

のが

ほとけしる

置

たま

後生の大火炎を脱るべし」と、仏記しおかせ給いぬ。

にちれん

じようぎようぼさつ

しかるに、日蓮、上行菩薩にはあらねども、ほぼ兼ね

知

か

ぼさつ

おんはか

ぞん

か

てこれをしれるは、彼の菩薩の御計らいかと存じて、この

にじゅうよねん

あいだ

もう

ほうもんぐつう

によらい

二十余年が間、これを申す。この法門弘通せんには、「如来

げん いま

おんしつおお

めつど

のち

の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」

いっさいせけん

あだおお

しん がた

もう

だいいち

敵

「一切世間に怨多くして信じ難し」と申して、第一のかたき

こくしゆ

ぐんごうとう

じとう

りようけ

ばんみんとう

は国主ならびに郡郷等の地頭・領家・万民等なり。これま

だいに

だいさん

そうりよ

訴

ぎようじや

た第二・第三の僧侶がうつたえについて、行者を、あるい

あつく

めり

とうじようとううんぬん

は悪口し、あるいは罵詈し、あるいは刀杖等云々。

あわのくにとうじようのこう

へんごく

にほんこく

しかるを、安房国東条郷は、辺国なれども日本国の

ちゆうしん

ゆえ

てんしやうだいじん

あと

た

たま

むかし

中心のごとし。その故は、天照太神、跡を垂れ給えり。昔

いせのくに

あと

た

たま

こくおう

は伊勢国に跡を垂れさせ給いてこそありしかども、国王は

はちまん

かもとう

ごき えふか

てんしやうだいじん

ごき えあさ

八幡・賀茂等を御帰依深くありて天照太神の御帰依浅かり

だいじんいか

思

とき

みなもとのうしやうぐん

もう

ひと

しかば、太神暝りおぼせし時、源右將軍と申せし人、

ごきしやうもん

相可

こたいふ

おお

ちやうだい

御起請文をもつておうかの小大夫に仰せつけて頂戴し、

いせ げぐう

忍

納

だいじん

みこころ

かな

たま

伊勢の外宮にしのびおさめしかば、太神の御心に叶わせ給

ゆえ

にほん

て

握

しやうぐん

たま

いけるかの故に、日本を手ににぎる將軍となり給いぬ。こ

ひと

とうじやうのこおり

てんしやうだいじん

おんすみか

さだ

たま

の人、東条郡を天照太神の御栖と定めさせ給う。され

だいじん

いせのくに

あわのくにとうじやうのこおり

ば、この太神は、伊勢国にはおわしまさず、安房国東条郡

栖

たま

れい

はちまんだいぼさつ

むかし

せいふ

にすませ給うか。例せば八幡大菩薩は、昔は西府におわせ

なかがろ

やましろのくにおとこやま

うつ

たま

いま

そうしゆうかまくら

しかども、中比は山城国男山に移り給い、今は相州鎌倉

つるがおか

す

たま

鶴岡に栖み給う。これもかくのごとし。

にちれん いちえんぶだい うち にほんこくあわのくにとうじようのこおり はじ

日蓮は一閻浮提の内、日本国安房国東条郡に始めてこ

しょうほう ぐつう はじ じとう かたき

の正法を弘通し始めたり。したがって、地頭、敵となる。

か もの はんぶん いまはんぶん りようけ 偽

彼の者すでに半分ほろびて今半分あり。領家はいつわり

愚 とき しん とき 破 ふじよう

おろかにて、ある時は信じ、ある時はやぶる。不定なりし

にちれんごかんき こうむ とき ほけきよう たま

が、日蓮御勘気を蒙りし時、すでに法華経をすて給いき。

にちれんさき 見 参 序 なんしんなんげ もう

日蓮先よりげんざんのついでごとに難信難解と申せしはこ

にちれん じゆうおん ひと たす

れなり。日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらんとためにこ

ごほんぞん たてまつ じゆうらせつさだ へんぱ ほつし

の御本尊をわたし奉るならば、十羅刹定めて偏頗の法師

思 きようもん ふしん ひと

とおぼしめされなん。また経文のごとく不信の人にわたし

にちれん へんぱ

あまごぜん わ み

まいらせずば、日蓮、偏頗はなけれども、尼御前、我が身の

失 知 たま

たま

とがをばしらせ給わずして、うらみさせ給わんずらん。こ

よし いさい すけあじやり ふみ

そうろう

め

あま

の由をば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ。召して尼

ごぜん げんざん い

たも

そうろう

御前の見参に入れさせ給うべく候。

おんこと

おんいちみ

ごしんじん

いろ

御事においては、御一味なるようなれども、御信心は色あ

そうろう

佐渡

くに もう

くに もう

たびたび

おん

らわれて候。さどの国と申し、この国と申し、度々の御

こころざし

弛

気色 見

たま

ごほんぞん

志ありて、たゆむけしきはみえさせ給わねば、御本尊は

渡

そうろう

つい

恐

わたしまいらせて候なり。それも終にはいかんがとおそ

おも

はくひよう

踏

たち

む

れ思うこと、薄氷をふみ、太刀に向かうがごとし。くわし

くは、またまた申すべく候。
もう そうろう

それのみならず、かまくらにも、御勘氣の時、千が
鎌倉 ごとかんき とき せん

くひやくくじゅうくにん

お

そうろうひとびと

せけん 和

九百九十九人は堕ちて候人々も、いまは世間やわらぎ

そうろう

悔

ひとびと

そうろう

もう

そうら

候かのゆえに、くゆる人々も候と申すに候えども、こ

に

不便

おも

れはそれには似るべくもなく、いかにもふびんには思いま

そうら

ほね

にく

替

そうら

いらせ候えども、骨に肉をばかえぬことにて候えば、

ほけきよう

そうい

たま

そうら

かな

よし

法華經に相違せさせ給い候わんことを、叶うまじき由、い

もう

そうろう

そうろう

きようきようきんげん

つまでも申し候べく候。恐々謹言。

にがつじゅうろくにち

にちれん

かおう

二月十六日

日蓮

花押

にいあまごぜんごへんじ
新尼御前御返事